注意： このファイルは著作権物であり法律で保護されています。
一切の転載および印刷を禁止します。
© TSUTSUI JUNYA

第１章　イントロダクション …… *7*

1.1 定義の問題 …… *7*

1.2 核となる概念としての「制度」 …… *11*

1.3 「橋渡しをする」ということ …… *16*

1.4 本書の特徴 …… *20*

第２章　制度とは何か？(1) …… *23*
市場を補完する制度

2.1 市場を補完する制度 …… *23*

2.2 新制度学派の立場 …… *26*

2.3 社会分化から市場に至る発達モデル …… *31*

2.4 支配と階層：「無能なのに支配」は合理的かもしれない …… *35*

2.5 市場から制度に至るモデル …… *43*

2.6 制度の「効き方」 …… *50*

第３章　制度とは何か？(2) …… *55*
出発点としての制度

3.1 社会学の多様性 …… *55*

3.2 非公式の制度 …… *56*

3.3 組織と制度(1)：経済学のストーリー …… *58*

3.4 組織と制度(2)：社会学のストーリー …… *63*

3.5 非効率的な制度はなぜ存続する？ …… 66
3.6 社会的デザインとしての組織と市場 …… 68

第４章　二つの制度モデルのあいだ …… 73
4.1 階層は制度か？ …… 73
4.2 効率性と公平性 …… 76
4.3 階層の温床としての家族制度 …… 78
4.4 結婚における市場と階層の関係 …… 82
4.5 近代社会の欠陥？：ランダムな結婚市場 …… 85
4.6 社会的ネットワークからの解放 …… 89

第５章　象徴の社会経済学 …… 93
5.1 制度論の応用としての情報理論 …… 93
5.2 広告と記号の制度分析 …… 94
5.3 情報化の制度分析(1)：組織の未来のかたち …… 99
5.4 情報化の制度分析(2)：メディアの未来のかたち …… 104
5.5 ミクロな相互行為の社会経済学：ゴッフマンの情報理論 …… 109
5.6 ミクロな相互行為における情報の不足 …… 113

第６章　再帰性と再帰的近代化 …… 117
6.1 効率性と公平性（再び） …… 117
6.2 再帰的近代化論 …… 120
6.3 自己選択・自己責任というけれど…… …… 123
6.4 「残された外部」を隔離する制度 …… 126
6.5 小まとめ …… 131

6.6 経済学的政策論議と社会学的政策論議 …… *133*

6.7 三つの政策論議の関係 …… *137*

6.8 最大で最後のライフポリティクス …… *139*

第７章　残された非効率性 …… ***143***
効率の良い知識の流通を目指して

7.1 どこに重点を置くべきか？ …… *143*

7.2 非効率な状態を効率よく達成？ …… *145*

7.3 象徴の流通法則(1)：モニタリングと統計学 …… *148*

7.4 象徴の流通法則(2)： …… *159*
意思決定フリーライダーとイデオロギー

第８章　方法論における若干の誤解 …… ***165***
「合理性」からは逃れられない

読書案内 …… *173*

あとがき …… *186*

索引（人名・事項） …… *191*

第1章　イントロダクション

1.1　定義の問題

「経済学を研究しています」という発言が、「難しそうだ」という反応を周囲に引き出すことがあっても、そう返された相手を混乱させることはまれであろう。「厚生経済学の基本定理」を知らずとも、なぜか世間は「経済学者が何をしているのか」についてそれほど混乱しないようである。同じことは心理学についてもいえる。

それに対して、「社会学を研究しています」と一般の人に伝えるときには少し覚悟がいるのではないだろうか。筆者自身、あまりいい思い出がない。たいてい、一瞬困惑したような表情をされる。じゃあ聞かなきゃいいのにとも思うが、とりあえず聞かれることは多い。このときのもどかしさは、ちょうど出身地を聞かれるときのそれとよく似ている。東京に住んでいる人は楽である。みんな比較的東京の地名を知っているからだ。それに対して福岡あたりになるとあやしくなる。「ご出身は？」と聞かれて「福岡です」と答えて、そこで問答が止まればいいが、「福岡のどのあたりで？」と続くとめんどうになる。筆者の出身地は福岡であるが、博多や小倉といったメジャーな土地ではないので、答えたところで「それはどのあたり？」という質問をさらに受け、「福岡市から電

車で……」と少々長い説明をするはめになるのである。

さて、「社会学を研究しています」と言われてしまった相手の当惑した反応の次にくるのは、よくて「特にどういう分野を研究されているのですか」「大学のときに授業をとったがなんだか難しかった」といった反応である。

社会学でも、実証的な研究をしている研究者であれば、こういった問答をうまくまとめることができるのではないだろうか。たとえば「少子化の要因について研究しています」といえば社会学をまったく知らない聞き手にも研究の内容を具体的に理解させられる。少しでも時事問題に関心を持つ相手であれば、少子化についてなんらかの見解を述べることもあるかもしれない。「そもそも女性が社会進出をしたのが要因なんでしょう？」と尋ねられたら、「それはそうですが、女性の労働力率が高くても出生率が高い国はいくつもあってですね……」などと話をつなぎ、なんらかの会話が成立する場面が想像できる。喧嘩でもしないかぎり、話が弾むのではないだろうか。

しかし社会学者がいわゆる理論（社会理論）研究者だと、弾む会話を望むことはほぼ絶望的である。「ウェーバーを研究しています」といっても平均的な日本人はまず名前を知らないだろうし――「そんなことはない」と思うのなら、認識を改めるべきだ――ウェーバーの理論の内容を短い会話の中で伝えることはとても無理である。それどころか、社会理論研究者や学史研究者は「自分が何を研究しているか、またしようとしているか」だけで一冊の本を書けるくらいであるの

で、そもそも短い会話の中で研究内容を理解させるようなことは無理だ、と感じているはずである。ただし、これは社会学が一般的に身近で実用的な学問だと想定されている、ということからきているのかもしれない。経済学の純粋理論家に対して素人がその研究内容を尋ねる動機はわかないかもしれない。

ともあれ、「社会学者は何をしているのか」についてのアカウンタビリティは、その社会学者が理論研究者なのか実証研究者なのかによって異なる、と言えそうである。実証研究者が説明にあまり苦労しないのに対し、理論研究者を自任している研究者はそうはいかないだろう。

では少なくとも社会学の内部では共通了解があるのかといえば、そうでもない。実証分野と理論分野のあいだには十分な対話と意思疎通が行われているようには思えない。人脈もみごとに分かれている。実証分野の内部においてさえ、フィールドを重視する立場、計量を重視する立場、その他文献調査を重んじる立場（社会史など）に属する研究者が、それぞれの専門を超えて活躍することは珍しい。理論内部でも、数理を駆使する人と、社会理論をおもに文献を読み込むことで研究する人のあいだでは共通基盤はほとんどない。また、一般に数字を道具としない社会学研究者のなかには、計量研究と数理研究がそれぞれ実証と理論に属するという意味で基本的に異なった立場である、ということをあまり意識しない人もいる。もっとも数理を扱える人はたいてい基礎的な――あるいは応用的な――計量研究もできることが多いのも事実で

あろうが。

「自分たちが何をやっているのか、何をやろうとしているのか」についての混乱は、何も日本の社会学研究者のあいだだけの問題ではない。ある年のアメリカ社会学会のことである。筆者が参加した「経済社会学」セクションが主催するあるセッションでは、同じような混乱が生じていた。セクション（部会）とはアメリカ社会学会の下部組織で、大会ごとに設定されるアドホックなものではなく、基本的には恒常的に存在し、チェア（部会の統率者）もいる。

経済社会学というのはアメリカ社会学会に数あるセクションのなかでも比較的新しいセクションで、とりわけ自己定義に苦労していた、という事情もある。だがいずれにしろ、同セクションの代表的な研究者たちがたがいに理解しあうのは困難だろうと感じざるをえなかった。最長老にあたるさる研究者は、主にウェーバーやシュンペーターの業績を研究している。プリンストンの中堅実力者は、経済取引や市場への文化の影響について研究している。別の若手研究者は経済学の新古典派と制度学派の対立から社会学が学べる部分を強調する。「いったいどうしてこれらの研究者をまとめるセクションをつくろうなどと考えたのか」とまで考えさせられたが、アメリカ社会学会ではセクションを確立して維持することは分野の研究者そのものの盛衰にかかわることなので（なんとセクションへのリクルート活動までやっている）、みなそれなりに共通基盤を作り上げようと必死であった。

これに対して、同じアメリカの社会学でも、「人種・ジェ

ンダー・階級」セクションや「家族社会学」セクションではそういった混乱はあまりみられないようである。そもそもこれらのセクションでは、分野の自己定義に苦労することはあまりない。これらのセクションの研究者は、たいてい豊富なサーベイデータをもとにした計量研究をコアに据えており、そのおもな目的は「階層・差別・人口に関する問題の実態把握と要因分析」である。意見が対立するのはたとえば「性差別をうむ要因は何か」についてであって、自己定義についてではない。実証分野での対立は、共通の基盤にのった上での対立であるので、聞いていて「このふたりの会話、まったくかみあってないな」と感じることはあまりない。

要するに、混乱しているのは日本でもアメリカでも「理論」がかかわってくる場合なのである。

となれば、「自分たちが何をやっているのか、何をやろうとしているのか」についての混乱をときほぐす一つの方策は、理論と実証とのあいだに橋を架けることにある、といえるではないだろうか。

1.2 核となる概念としての「制度」

しかし理論と実証のあいだの架け橋といっても、同じような問題を、社会学にとって近隣の学問であると言える経済学も抱えているようには思えない。経済学の場合、少なくとも社会学よりは理論と実証はずっとスムーズに連携している。少なくとも社会学のように、両者のあいだでまったく話が噛み合ない、ということはあまりないであろう。精神分析を除

けば、もう一つの近隣領域である心理学においても理論と実証はある程度うまく連携しているようにみえる。

とすれば、理論と実証のあいだの分断というのは、特に社会学が悩みがちな問題である、ということになる。もしそうであるなら、社会学とその他の近隣分野との境界について見通しを立てておくことが必要になるだろう。

さきのアメリカ社会学会の経済社会学セクションでのセッションの話に戻ろう。セッションでの議論が続いていくなかで、研究分野の自己定義と今後の方向性について、混乱したなかでも一つの基盤が見えたことは幸いであった。多様な関心を持つ参加者がつねに意識していたのは、経済学との差異化、さらには制度についての見解であった。その見解の中身をごくごく簡単にいえば、「社会学は経済学、特に新古典派の理論では説明できない数多くの現象を説明するのが目的である」こと、そしてその際のキーワードとなっているのが、「制度」「文化」「ネットワーク」の三つである、ということである。

ここで「制度」と「文化」という言葉で想定されているものはそれほど異なっていない。あえていえば、文化は非公式的な制度である、と定義できる。三つ目の「ネットワーク」であるが、これは制度という言葉ではうまくとらえられない意味を含んでいる。ここ最近大きな注目を集めてきたこれらの理論についてくわしく知りたい読者は、グラノベッター（M. Granovettor）の論文か、社会関係資本論 social capital theory についての著作、とくリン (N. Lin) やマースデン (P.

Marsden) の著作を一読されたい。ただし残念ながらこれらの論文や著作の邦訳は少ない。がんばって英語を読むしかない。だが、グラノベッターは少なくとも北米ではスターである。読む価値はある。ノーベル経済学者（たとえばK. アロー）が書いた文章でもグラノベッターが引用されることがあるくらいである。日本でも近年良質な社会的ネットワーク論の論文や著作が多く出版されるようになった。

制度とはそもそも何なのか？　という問いにはあとでできるだけ分かりやすく答えていくので、ここではとりあえず制度が何かを理解しておく必要はない。ともかく、本著の最初の目的は、制度という概念を糸口として、社会学の学問上の位置づけについての一つの整理をすることにある。制度分析にとくべつの意義を見いだそうとするのは経済社会学であるが、制度概念は他の社会学分野を位置づける際にもきわめて有効である。

さて、ここで「べつに自己定義が不確定なままでもまったく構わないのではないか」という意見もあるかもしれない。しかし特に社会学の教育に携わる者にしてみれば、これはできれば片付けておきたい問題ではないだろうか。「先生も自分が何を研究しているんだかよく分からないけど、とりあえず教えるよ」「社会学とは何かって？　それは講義がぜんぶ終わればなんとなく分かるだろうよ」という態度で講義をしてもきちんと聞いてくれる学生は、きっと特別に知的好奇心の強い学生なのだろう。現実にはそうではない学生もたくさんいる。

筆者は「社会学ってそもそも何なのですか？」と聞いてくるとりあえず学生にこう教えている。「社会学は制度の実態・成り立ち・影響について調べる学問だ」と。もちろんこう応えても学生はすぐには理解できないだろうが、数年間社会学の講義を行ってきて、少なくとも1時間をかけて「制度」について話せば、たいていの学生には現在の社会学の全体のイメージが伝わるまでになった。経済階層、ジェンダー、家族を含めた社会学の代表的なトピックを統一的に説明する際に、筆者は制度という言葉以上に便利な言葉を知らない。もちろん他のもっと優れた社会学研究者からすれば、筆者は的外れな教え方をしているおそれもある。だが、特に社会学についてまったく知らない学生に教えていく場合、とにかく一つの完結した「ストーリー」が伝わることが肝心である。制度という言葉を使えば、まがりなりにも社会学の重要なトピックについて一貫した説明ができているように思える。

しかしここで理論研究家のなかには、「制度概念を重視し社会学を説明するこういったやり口はきわめて偏っている」と感じる人も多いであろう。社会学が伝統的に取り扱ってきた他の重要な概念や方法はどこに行ったのか？　道具的合理性は？　相互行為分析は？　構築主義は？　もとより本書のなかでこういった多くの有用な社会学の概念や方法を位置づけることは無理であるので、多くの場合は単純にスキップせざるを得ない。そもそも制度という言葉を「乱用」することに違和感を感じている理論家も多い。その意味で本書には少なからず偏りがあり、その点は批判をあまんじて受け入れる

しかない。しかし本書のなかで、制度以外に一つだけ重点的にとりあげる社会学の概念がある。

それは「再帰性 reflexivity」である。再帰性とは何か、という説明はあとで行う。ここでは、どうして再帰性なのか、ということを述べておく。理由は三つある。

一つめは、再帰性という概念が、社会学の理論家と一般人との関心との断絶を典型的にあらわしているように思えるからである。まず間違いなく、一般人は制度という言葉を知っているし、また少々インテリの人ならばあるべき制度についての自分なりの見解、たとえば理想的な経済体制や政治制度についての見解をもっているかもしれない。それに対して、再帰性という言葉を知っている一般人はほとんどいない。再帰性という言葉によって表される様々な現象についても、ふつうの人はうまく理解できていないであろう。さきほど、本書の目的の一つが理論と実証の橋渡しにある、と書いた。理論は分かりにくいのに対して、実証は――その方法はともかく結果は――一般人にも理解しやすいものである。ここで一般人に理解できない社会学理論の言葉である再帰性を攻略すれば、つまり再帰性とは何かを分かりやすく説明することができれば、理論の言葉の代表格ともえいる再帰性について、あるいは理論一般について、実証研究者がとりうるスタンスも明らかになるかもしれない。

二つめの理由。制度という言葉は経済学でもひんぱんに登場し、制度が何をさしているのかについてもかなり統一した見解が共有されているのに対して、再帰性という言葉を聞く

のはほとんど社会学の世界のなかでである。もちろん経済学にも心理学にも再帰性という言葉は存在するが、社会学ほど多用されているわけではない。したがって、再帰性について説明することは、社会学を他の近接学問研究者に開く一歩となる。

三つめの理由は、筆者の主観的評価もあるが、現代社会の動向を理解するうえで、そして社会理論の政策的有効性を補強する上で、再帰性という言葉はきわめて有効である、という見込みがあるからである。

1.3 「橋渡しをする」ということ

ところで、筆者は本書で、自分の考えを「論じる」というよりは「説明する」という態度を維持しようと考えている。理由は単純で、後者の方が逃げ場がなさそうな気がするからである。学会報告などでもそうであるが、小難しい内容を漫然と発表すれば、聴衆としては理解を阻害されるが、報告者としては聴衆からの批判的な（致命的な）コメントを逃れることもできる。ごくまれにであるが、不幸なことに、意図的に理解されまいとしているのでは、という報告に出会うこともある。筆者自身も、学会を前にして報告内容に自信がないときなど、意図的に内容を分かりにくくして逃げを打ちたくなる誘惑に駆られたこともある。本書の目的の一つが理論と実証、社会学と近隣分野、社会学研究者と一般人の「橋渡し」にあるのであれば、こういった誘惑を避けるよう心がけることは非常に大事なことであろう。もちろん、どう工夫し

ても難しいものは難しい、ということはあろう。しかしそのことと、内容を不必要に小難しくすることとは違う。

そもそも筆者は、「説明する」あるいは理解するということは、「媒介すること」であると考えている。経済学者が社会学者のいうことを理解する、ということは、経済学とはまったく異なる社会学の知識体系を学ぶ、ということではなく、慣れ親しんだ経済学の言葉に照らして社会学を理解する、ということである。逆にいえば、うまく媒介ができていないうちは、真に理解した気持ちにはならないのではないだろうか。

たとえば経済学には「効用」という基本中の基本にあたる言葉がある。対して社会学者は効用という言葉をほとんど使わない。そういう社会学者も、経済学の教科書を読めばいちおうは効用の定義について知ることができる。簡単にいえば、効用とは「幸せ」の度合いのことである。「一杯のコーヒーから受け取る効用（幸せ）の大きさは個人によって異なる」「二杯目のコーヒーから受け取る効用（幸せ）の大きさは、一杯目のコーヒーから受け取る効用よりも小さくなる。なぜなら、飽きるから（限界効用が逓減するから）である」といった使い方をする。社会学者でも、ここまでは分かる。しかしどこかしっくりこないはずである。自分たちがふだん使っている知識の体系に入ってこないからである。

ここで理解を一歩進めてみよう。経済学者は、原則的に「効用の中身（どうして個人の効用が特定の構成になっているのか）については問わない」というのは、たいていの場合経済学者は、個人の効用の組み合わせ（効用関数）を前提とした

上で、全体の効用を最大化する選択は何か、ということを明らかにしようとするからである。ある人の効用関数にバナナしかないなら、その人は手持ちのお金がなくなるまでバナナを買う。それが効用を最大化させる行動である。バナナをいくつも食べていると、そのうち飽きてくるかもしれない。31 本目のバナナから得られる効用は、30 本目のバナナから得られる効用よりも小さい。しかし 31 本目の効用がどんなに小さなものでも、それが 0 より大きい限り、お金をバナナにつぎ込むのは合理的な選択となる。こういった場合、経済学者の出番はあまりないかもしれない。「お金がなくなるまでバナナを買って食べなさい、そうすればあなたは最も幸せになれる」が答えだからである。しかし個人の効用関数はふつうもっと複雑である。だいいち、バナナを食べてばかりだと働く時間がなくなるので、バナナと所得のトレードオフを考えなくてはならない。しかしこの問題は少々ややこしいのでスキップする。ここでは、ある人がバナナとヤキトリが欲しい、としよう（働く時間は考えない）。この場合、経済学の発想は「その人にとってバナナとヤキトリを交換しても問題ない」というポイントを前提におく、というものである。

たとえばその人はヤキトリが大好きなので、ヤキトリ 1 本と交換できるバナナの本数は 5 本だとしよう。しかしヤキトリでもやはり 2 本目の効用は 1 本目よりも小さくなるので、ヤキトリ 2 本と交換できるバナナは 10 本よりは少なくなるかもしれない。こうして描かれる「交換できるポイント」をつなげてできる線を「無差別曲線」と呼ぶ。個人の効用が最大

化されるのは手持ちのお金を目一杯使って、かつ無差別曲線上にある比率でバナナとヤキトリを購入したときである。これはバナナとヤキトリの値段、その人にとってのバナナとヤキトリの交換（してもいい）比率の集合、手持ちのお金の額が決まっていれば、あとは計算によって求めることができる。

このように、経済学者が行う計算は、財の価格や個人の効用関数を前提としたときに、個人の効用を最大化させる選択は何か（バナナとヤキトリを何本ずつ買えばいいのか）、ということに関するものである。社会学者はふつこういう計算をしないし、またそういう発想をすることもない。そうではなく、つぎのようなことに興味を持つはずである。そもそもその人はなぜヤキトリが好きなのか？（ある人をヤキトリ好きにする要因は何か？）　ヤキトリとバナナの嗜好の強さの違いを説明する要因は何か？　ヤキトリとバナナの例だと少々不自然だが、こうした問題設定をたて、簡単な仮説を構築し、実証研究を行うのが社会学的研究としては典型的であろう。たとえばある人のヤキトリ好きの要因は親のヤキトリ好きなのか、それとも性別や学歴なのか？といった問題設定をする。具体的には、「親がヤキトリ好きであれば子どももヤキトリ好き」という仮説を立てて、調査を行って仮説検定を行う。あるいは学歴や収入、居住地域をコントロールした上で、「親のヤキトリ好き」が「子どものヤキトリ好き」に有意に影響しているのかを、適当な統計モデルの推計によって明らかにしようとする。

とすれば「社会学者は経済学者が出発点としている状態の

成り立ちを知ろうとする」という関係にあるということがいえる。ここまで説明すれば、「効用」に関して経済学者（少なくとも理論経済学者）と社会学者がとりうる立場を互いが理解できるのではないだろうか。すなわち一方はそれを出発点とし、他方はそれを説明の対象とするのである。これで「橋渡し」、つまり理解が、もちろん全面的にではないが、少なくとも一つ達成されたことになる。

1.4 本書の特徴

別の観点から見てみれば、本書は筆者が「社会学って何？」という問いかけに直面して数年間経験した困難をいかに解決してきたか、ということのストーリーになっている。対象読者として念頭に置いているのは、おもにこれから社会学を研究してみようと考えている若い人であるが、同じような苦労を経験されている社会学研究者の方にも読んでいただければ、とも考えている。なんらかの参考になれば幸いである。社会学を専門に研究されている方々には、本書で基本的な概念が定義されるときに過度に単純化されているように感じられる人もいるかもしれないが、分かりやすさとのトレードオフだということで、どうかご容赦願いたい。

また、本書では基本的に「社会学理論では……」といった文章で説明する場合、ちくいち「どの社会学者のものか」を明示しないようにしている。こういった記述法は通常の学術論文ではあまり見られないスタイルかもしれない。しかし本書で示されているのは「社会学理論の一つの典型としてのモ

デル」である。筆者は理論の一つの重要な働きは「単純化」にあると考えるので、煩雑な参照関係を省略して本書の理解を促進するためにこういった方法をとることにした。個々の理論はこのモデルから偏差として位置づけていただければ、と考えている。本書で説明するのは単純化されたストーリーであって、読者各位がこれをもとによりリアリティのある「理論」を作っていくことが望まれる。読むにあたっては、自分にとってのなじみのある理論を思い浮かべながら、「ああ、ここはルーマンの社会理論に近いな」とか「ここはギデンズの構造化理論そのものじゃないか」というふうに考えながら読まれると意外に楽しいのではないだろうか。とはいえ、これから社会学を学ぼうとする人たちにとってはこれでは物足りないかもしれないので、本書の最後に読書案内を兼ねた参照文献紹介をすることにした。

これから社会学を志す人たちからすれば、本書の内容、特に前半部のストーリーは「制度」や「経済」の話が多く、面食らうものであるかもしれない。「社会学ってもっと柔らかくて楽しそうだと思っていた」ということになるかもしれない。しかし、そこは少々耐えていただきたい。社会学はこれからますます、経済学や心理学などの近隣分野と連携、そして競争するという課題をクリアしていかなくてはならない。このとき、うかうかしていると、近隣分野の学者から「なんだ結局、社会学なんていらないじゃないか」となりかねない。実際そう考えている近隣分野の研究者は少なからずいる。筆者自身は「社会学は必要ない」とは考えていない。そのこ

とを本書のなかで証明する、まではいかないまでも、社会学をこれから学ぼうとする人、あるいは学んだはいいが位置づけをうまくできていない人にとっては、本書は「社会学の場所」を考える際の手がかりにはなるだろう。

もう一つだけ、特に今から社会学を志そうとしている方や、現在プロフェッショナルな社会学者であるが、オリジナリティのある見方を提起できずに悩んでいる方に向けて、この本には一つのメッセージがある。それは、社会学的な想像力は、いっけんくっつきそうにないものを媒介するところから生まれることがある、ということである。特に経済学と社会学の「あいだ」には無限のアイディアが眠っている。読者の方々のうち、なんらかのかたちで行き詰まりを感じている方がいるなら、この本を読むことで少しでもそういったコツを見いだすことができれば、それ以上の喜びはない。